

# 美大のなかのフランスアニメ

—ジャン=フランソワ・ラギオニ『お嬢さんとチェロ弾き』をめぐって—

French Animation in Bidai : Around *La demoiselle et le violoncelliste* by Jean-François Laguionie

青柳 りさ  
AOYAGI Risa

## 0 はじめに

デ・キリコやアンリ・ルソー、シュルレアリスムの作品群を思わせるカットが動いている点に驚いた。僕たちはジブリの名作に触れて育ってきたけれどこうした海外のアニメーションがもっと日本で見られてもよいのではないだろうか。イラストレーション、アニメーション、音楽…そのすべてが子供たちにとって刺激的に映るだろう。

「カットが動く」、アニメーションが始まる瞬間である。1年生のフランス語の導入に、ジャン=フランソワ・ラギオニの『お嬢さんとチェロ弾き』<sup>1</sup>を紹介している。8分54秒の短編アニメーションである。波に攫われたお嬢さんとそれを追って海の底へ誘われたチェロ弾きが、一度は二人して海の底から浜辺に上がってくるが、再び手を取り合ってどこへともなく走り去っていく、という物語である。

1965年、アヌシー・アニメーション・フェスティヴァルでグランプリを獲得している。波の音と鷗の鳴き声とチェロの演奏のみで、登場人物が言葉を発することはなく、学生は十分にフランスのアニメーションを体感しているようである。「子供たちにとって刺激的に映るだろう」とあるが、おそらく子供たちよりも、日本のアニメをよく知る学生たちに、より新鮮で刺激的なのではないだろうか。学生たちの興味、感想、疑問にこたえながら、『お嬢さんとチェロ弾き』を鑑賞したい。

## 1 断崖



エトルタの断崖<sup>2</sup>



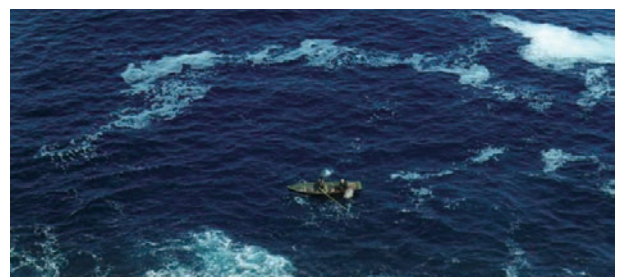
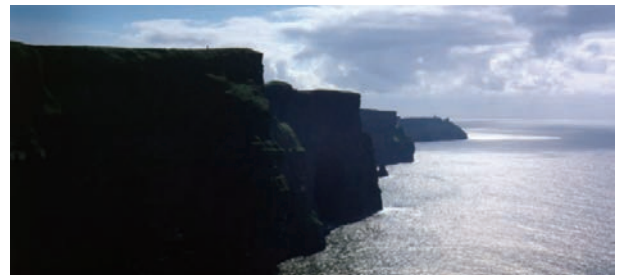
モハーの断崖<sup>3</sup>

断崖の上で男がチェロを弾く。海では女が網で魚をすくっている。女の帽子が風に飛ぶ。女も風に飛ばされて波にのまれる。男は彼女を助けにボートを漕ぎだす。『お嬢さんとチェロ弾き』の冒頭である。



『お嬢さんとチェロ弾き』(1965)<sup>4</sup>

モハーの断崖からふわりと日傘が風に飛ばされる。その傘を沖合のボートが拾う。『ライアの娘』<sup>5</sup>の始まりの映画史に残るシーンである。『お嬢さんとチェロ弾き』を見た時、ああこれはモハーの断崖で、このシーンは『ライアの娘』に想を得ているのだと思った。



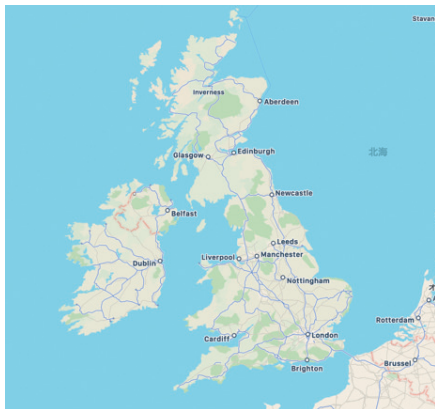
『ライアの娘』(1970)<sup>6</sup>

しかし、制作年をみると逆である。『ライアの娘』が公開されるのは1970年、『お嬢さんとチェロ弾き』はそれを5年遡る1965年である。そして『お嬢さんとチェロ弾き』の断崖と浜辺が想定されるのは、アイルランドのモハーではなく、ノルマンディーのエトルタである。

脚本を担当したロバート・ボルト<sup>7</sup>の伝記には、『ライアの娘』は19世紀のフランス小説『ボヴァリー夫人』<sup>8</sup>に想を得ているとある<sup>9</sup>。アイルランドの小さな漁村で、美しく現代的な夢見る女性ロー

ジーは、年の離れた優しい夫（チャールズ）がありながら、村へ赴任してきたイギリス人将校（ランドルフ）と不倫関係に陥り破滅していく。なるほど、『ボヴァリー夫人』の主人公エンマ・ボヴァリーがロージーに、エンマの夫のシャルル・ボヴァリー（Charles Bovary）がチャールズ（Charles）に、エンマの不倫相手のロドルフ（Rodolphe）とレオン（Léon）がランドルフ（Randolph）にと、その命名も原作を意識している。

伝記には、ロケ地がアイルランド最西部のディングル半島と南アフリカのケープタウンの海岸に決まった経緯については詳細に記されているが<sup>10</sup>、モハーの断崖についての言及はない。もちろん、ラギオニのアニメーションについても言及されていない。アイルランドの美しい海岸一気に観客を引き込む『ライアの娘』の冒頭シーンは、村を去るロージーの帽子が風に飛ばされ、村の女たちに刈られたロージーの頭が露わになるという残酷な最終シーンと呼応し、映像上も構成上も重要なシーンである。



Copyright ©  
2012-2020  
Apple Inc.

果たしてボルトは、あるいは監督のデヴィッド・リーンは、5年前の短編アニメーションなど知らなかったのだろうか。あるいは当時はそのような借用は気にしないでいいものだったのか。アニメーションなどにはそれほど敬意をはらわなくてもよかったのか。映画好きのラギオニが『ライアの娘』を見ていないとは考えられない。あるいはラギオニはあまり気になどしないのかもしれない。

## 2 波

海面の波の表現が秀逸だと思った。シンプルだけど迫力があって引き込まれた。

海の波の表現も独特でありながらとても作風に合致していると思う。

波の演出がおもしろかった。

海の波が何層にもなって奥行きが出されている表現には北斎の富嶽三十六景にも同じような表現があったな—と思った。

冒頭の波の描写やチェロ弾きの演奏を見ていて、「音楽に合わせて絵が動く」ということに対する喜びを強く感じた。

冒頭の波とチェロのBGMが緊張感があって驚いた。

波や風景の遠近のパーツを分けて動かしているのが面白いと感じた。

人物や波はどのように動かしているのか知りたい。

海の波に女性とチェロ弾きがさらわれるシーンは不安な気持ちになったのだが、どの場面においても色彩豊かで美しかった。

海鳥が、空を飛ぶ様子（風にあおられながら）、魚が海を漂う様子、食べようとする様子など、動きと静止のタイミングがとてもリアルでとてもよく観察されたのだろうと感動した。海の波の表現も独特でありながらとても作風に合致していると思う。

チェロの音楽が波の動きと合わさって波を操っているようで綺麗だと思った。

断崖に続くのが波のシーンである。不吉なチェロの音色が高潮（raz-de-marée）<sup>11</sup>を呼び、風がお嬢さんの帽子を飛ばし、お嬢さんを攫っていく。この波



を見たとき、こんどは、宮崎駿の『崖の上のポニョ』<sup>12</sup>の波の原型はこれだと思った。



『お嬢さんとチェロ弾き』(1965)



『崖の上のポニョ』2008<sup>13</sup>

宮崎駿は、1963年に東映動画<sup>14</sup>にアニメーターとして入所する。その東映動画では、ポール・グリモー<sup>15</sup>の『やぶにらみの暴君』(1955)が新人教育の機会などに試写されたという<sup>16</sup>。そのグリモーのスタジオで『お嬢さんとチェロ弾き』は制作され<sup>17</sup>、1965年、アヌシー・アニメーション・フェスティヴァル<sup>18</sup>の短編部門でグランプリ (Cristal d'Annecy) を受賞するのだが、宮崎、高畑の二人もこのアヌシーのフェスティヴァルの長編部門で、1993年、1995年にグランプリ (Cristal du long métrage) を受賞している<sup>19</sup>。『お嬢さんとチェロ弾き』は、宮崎駿がアニメーターとして活動を始めた時期に世界的評価を受けた作品である。『崖の上のポニョ』はアニメーションの原点に回帰しようというコンセプトのもとに制作されたとされるが<sup>20</sup>、まさしくその原点の時代の作品である。

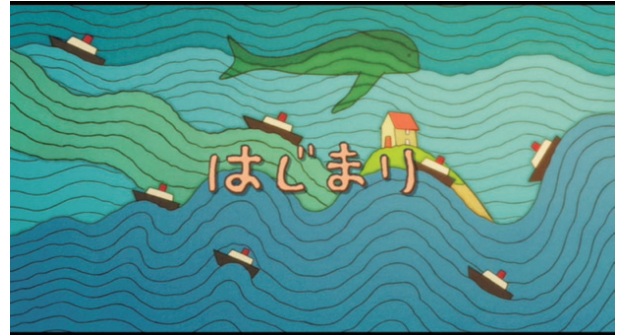
宮崎駿は、ロバート・ホワイティング<sup>21</sup>との対談で、「あのような波や嵐は、宮崎監督が実際に目で見て、観察して、描いたものなんですか？」という問いに、「たまたま旅行で見た北イングランドの荒れる北海の波に刺激されました。自分の知っている太平洋の波とは違っていました。まるで無数の怪物がのたうつようです。これなら描けるかもしれないと思ったんです」<sup>22</sup>とこたえている。もちろん、ラギオニの名前は出てこない。

しかしながらやはり描いているのは同じ海の波のようである。イギリス海峡 (ラ・マンシュ海峡) はそのまま北海へとつながる。重なって見えたのはその映像なのか原風景なのか。

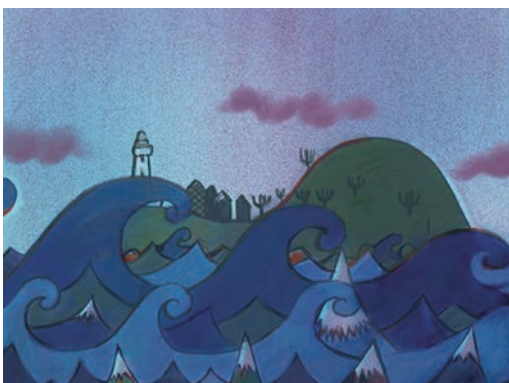


Copyright © 2012-2020 Apple Inc.

一方で、『崖上のポニョ』の原点には、日本のアニメーションも認められるようである。1964年から1969年までNHK総合テレビで放送された『ひょっこりひょうたん島』<sup>23</sup>の冒頭のアニメーション部分である。



『崖上のポニョ』 2008<sup>25</sup>



『ひょっこりひょうたん島』 1967<sup>24</sup>

アニメーションを担当しているのは、日本のアニメーターの草分け的存在でもある久里洋二<sup>26</sup>である。この久里洋二は、じつは、1965年、ラギオニがアヌシーでグランプリを受賞したときの8人の審査委員（フランス、カナダ、ポーランド、チェコスロバキア、英国、米国、日本、ルーマニア）の一人であった。『崖上のポニョ』の原点とも見えたラギオニと久里洋二は同じ時代と同じ場所で繋がっていた。

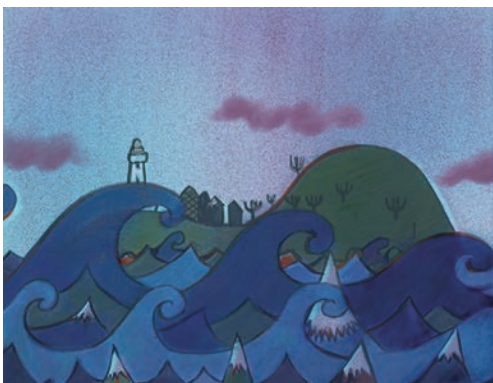
久里洋二（1928生）とラギオニ（1939生）も、おそらくは相互に影響を与え合いながらそれぞれに独自の世界を展開していたのであろう。

そしてそれをさらに遡ったところに、「海の波が何層にもなって奥行きが出されている表現北斎の富嶽三十六景にも同じような表現があったな—と思った」と学生が書いているように、19世紀末から今日までフランスのアートシーンに多大な影響を与え続けている北斎の波も見えてくる。





『お嬢さんとチェロ弾き』(1965)



『ひょっこりひょうたん島』 1967<sup>27</sup>



葛飾北斎「神奈川沖波裏」1829-1832<sup>28</sup>

### 3-1 海の底 その1

水の中で二人はまた別れまた会うまでユーモアがあって面白く感じた。

変な魚?とカニが戦っているところに男がすっと入っていったところが面白かった。全体的に効果音が大胆で笑ってしまいそうになる。静止画のところがジワジワ笑える。キャラクターの表情が穏やかで逆に怖かった。

カニとシーラカンスの戦いが面白かった。

重めのゴツい音楽と、絵とストーリーのコミカルさのギャップがなんとも言えないおかしさ(シュールという言葉があっているような気がします)を生んでいると思う。コメディ。

言葉はないけれど映像と音楽だけで面白いし話も謎でなぜか笑えて面白かった。

見ていて不安な気持ちになるがとても引き込まれてしまう。怖いのに少し笑えるのが良い。

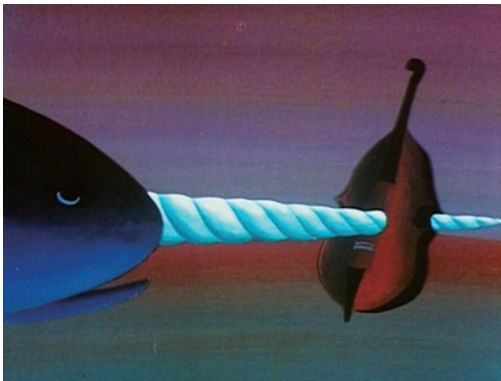
魚の口からドリル(?)が出てくる発想、チェロ弾きの男は間抜けなのか運が良いのか、そして最後の沈黙の時間など、不思議な雰囲気の商品だと思った。

チェロを弾くと魚が集まってきてそれ以降も魚がチェロについて行くところが面白いと思う。チェロのおかげで男性は命拾いをしていて危機一髪だったし良いタイミングで大きい魚から逃れられているのが気持ちよかった。

海に助けに行く時も、巨大なカニ?を追いかける時もチェロを持って行くのに最後手を引っ張られて海から出るときはチェロを放って行くのが愛情の見え

るストーリーになっていて最初の方は見ていてもどんなことを伝えたい作品なのかわからなかったけど納得がいった。

二人を呑み込んだ嵐がおさまったあとの静かな海底で、お嬢さんは岩に座り、チェロ弾きの演奏に耳を傾けている。と、こんどはお嬢さんが岩と思って座っていた巨大なカニが動き出し、お嬢さんを連れ去ってしまう。チェロ弾きはカニを追いかけ、そのチェロ弾きを一角が追いかける。そしてなぜか、お嬢さんとチェロ弾きをそっちのけでカニと一角との死闘(?)が始まる。



『お嬢さんとチェロ弾き』(1965)

パスカル・ヴィムネ<sup>29</sup>は『お嬢さんとチェロ弾き』の冒頭の海景について、「空の澄んだ軽さはエーテルを、鏡のような滑らかな海面は隠された深みを感じさせる。ほとんど動きのない画面は、その紙の折り目の中に、新鮮な春の色、小さくて悲喜劇的な(tragi-comique)人間の物語を封じ込めている」<sup>30</sup>と解説している。一角の攻撃を知らずにやり過ごすチェロ弾きや、それに苛立つ一角、片足で立ち上がって一角との闘いを繰り広げるカニ、学生の言うように、コミカルでシュールな展開である。

### 3-2 海の底 その2

海の中の魚の動きや出てくるところで「ポニョ」を思い出した。  
海の中の動きが良かった！！

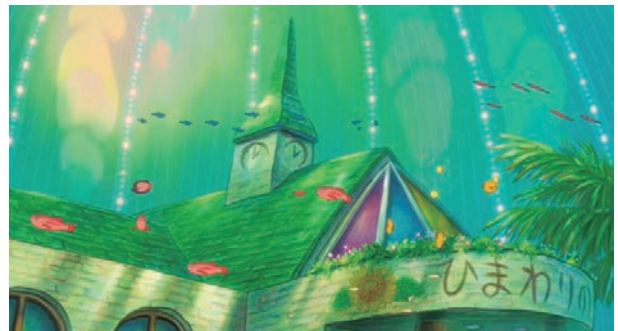
私も、『お嬢さんとチェロ弾き』を見ながら、「ポニョ」のことを思い出していたので、重なるシーン



をさがしてみた。



『お嬢さんとチェロ弾き』(1965)




『崖の上のポニョ』2008<sup>31</sup>

結果、映画を見た時に思っていたほどぴったりと重なるわけではなかったが、それでも、魚たちには同じ気配を感じられるし、また同じ種類の空気（空気のなさ？）が伝わってくる。

#### 4 波と音楽

冒頭の波とチェロのBGMが緊張感があって驚いた。冒頭の波の描写やチェロ弾きの演奏を見て、「音楽に合わせて絵が動く」ということに対する喜びを強く感じた。キャラクターの動きが単調だからこそ音による演出のキレが際立っていたように思った。キャラの感情やシーンの雰囲気、音、そして色で計



算されながら作られているという印象を受けた。  
音楽と動画がマッチしていてゆったりとした時と緊張感のある時とのメリハリがすごい。  
チェロの音楽が波の動きと合わさって波を操っているようで綺麗だと思った。  
低音から高音へ音楽が変わり場面も変わるところが不安さと高揚感が感じられてよかった。全体的に曲も暗くて摩訶不思議すぎる。でも時代を感じさせない技術力は圧巻です。  
最初の方は効果音的なものはほとんどなくて、波の音、風の音、チェロの音が主であって、物語を想像させるものだなと思った。物語が進むにつれ効果音が多くなって、自然の音（波、風）が少なくなって臨場感があるように感じ、これは意図しているものだと思うのでそれによって良い感じになっている気がした。  
セリフはないけれど緊迫したシーン、盛り上がりをもつ曲の感じを出していて素敵だった。  
音声がないという点においても映像の持つ特有な空気感を一層際立たせていて色々学ぶものがある。  
（ビーチには知らない人しかいない）ことや生き物が手前、奥の動きがなく、の左右の動きの中で全ての動きを出しているところが面白かった。その点で弦楽器のボーイングの動きにぴったりだと思った。曲は怖いけれど世界観が独特で引き込まれた。  
音楽がとても美しくそれにアニメーションが合わさる構成に作品としてとても洗練された印象を感じた。人物に台詞を当てないことで見る人に物語を想像させるようになってきているのかと考えた。  
少し悲しい音楽が映像にとっても合っていると感じた。映像の色彩も全体的にくすんだBGMがわりに重低音で常に流れていたのどにかく怖かった。  
カニがお嬢さんを連れて行った時の音が好きだ。  
フランスの映像作品は静けさの音があるような気がする。チェロの音が波の音、静けさに音響のこだわりを感じる。重めのゴツい音楽と、絵とストーリーのコミカルさのギャップがなんとも言えないおかしさ（シュールっていう言葉があっているような気がします）を生んでいると思う。  
ルソー的な絵、詩的な動く絵本、悲観的な音楽（起伏のある）。  
ストーリーが難解だったり音楽が陰鬱で全体的に不

気味な印象を持った。  
言葉はないけれど映像と音楽だけで面白いし話も謎でなぜか笑えて面白かった。  
音楽のせいか全体的に怖い雰囲気があった。  
音楽とアニメが合っていてセリフはないけど人物たちの気持ちなどわかりやすく面白かった。  
台詞のないアニメーションで普段の見慣れたものと違い新鮮だった。音楽と映像で紡がれたストーリーに惹きつけられた。  
登場人物が何も話さないところが映像に不思議な凄みを付け加えているんだなと思った。音声がないという点においても映像の持つ特有な空気感を一層際立たせていて色々学ぶものがある。  
どこで止めても絵画作品として展示できそうな独特で綺麗なアニメーションだった。音楽とのコラボも良かった。  
お嬢さんへのかなわない愛を暗いハーモニーの曲で海に向かって弾きだしたチェロ弾き。あまりにも重い愛を歌ったから海が「もう何もかも壊してしまえ！」と言わんばかりに荒れ狂い二人を海へ誘い途方も無い海の旅をさせた。  
味のある深い色にチェロの音がとてもあっていて素敵だった。水中で演奏している時の音の表現が面白いなと思った。

「小さくて悲喜劇的な (tragi-comique) 人間の物語」を、のちにラギオニは、ポール・グリモアの『小さな兵隊 (Le Petit Soldat)』<sup>32</sup>を思い出しながら「メランコリー (mélancolie)、無言劇 (mime)、音楽 (musique) という偉大なMの錬金術」と定義したかもしれない(…)メランコリックで (mélancoliques)、離れていて (décalés)、驚きと理解の欠如で言葉を発することのない (muets d'étonnement et d'incompréhension) お嬢さんとチェロ弾きは、世界の音楽 (musique du monde) に運ばれて初めて動き出すことができる。<sup>33</sup>

ヴィムネの言う「世界の音楽 (musique du monde)」とは、チェロ弾きの演奏する音楽だろう。この音楽が、接点のない二人を引き合わせる。不穏なチェロの音色は、風を呼び、お嬢さんの帽子を飛ばし、風

はお嬢さんを攫い、チェロ弾きはお嬢さんを追って舟を漕ぎ出すことになる。

音楽は、エドゥアール・ラロ<sup>34</sup>による「チェロ協奏曲ニ短調」(1876)<sup>35</sup>である。『お嬢さんとチェロ弾き』のために作曲されたかとも聞こえたが、なるほど19世紀末、『お嬢さんとチェロ弾き』の時代の音楽であった。作画していたとき、ラギオニの耳には曲が聞こえていたのだろうか。

「音楽に合わせて絵が動く」ことへの喜びを感じた、「音楽と動画がマッチしている」、「チェロの音楽が波の動きと合わさって波を操っているようだ」、「音楽がとても美しくそれにアニメーションが合わさる構成に洗練された印象を受けた」、「少し悲しい音楽が映像にととても合っている」、「味のある深い色にチェロの音がとてもあっている」、「映像と音楽だけで面白い」、「音楽とアニメが合っていてセリフはないけれど人物たちの気持ちなどわかりやすい」、「音楽とのコラボも良かった」という学生たちは、音楽と作画のコラボレーションを楽しんでいるようだ。

## 5 絵画

絵の感じがルソーみたいで夢のような風景だけど少し不安になる画だと思った。

ルソー的な絵、詩的な動く絵本、悲観的な音楽(起伏のある)。

デ・キリコやアンリ・ルソー、シュルレアリスムの作品群を思わせるカットが動いている点に驚いた。

不思議な作品だと思った。人物や背景がルネ・マグリットの絵のようだからそう感じたのかもしれない。

不気味な作画は現代絵画でよく見かけるようなタッチだった。

シュールにデフォルメされた登場人物たちが個性的な動きを見せるがその中で女性らしさや男性らしさ、時には不気味さを感じさせられて惹きつけられた。

絵や物語がまさにシュールでとても衝撃だった。

全体の雰囲気がシュルレアリスム絵画のようで面白かった。

学生が挙げたアンリ・ルソー、デ・キリコ、ルネ・マグリットの三人の画家の名前を、ラギオニも挙げている。影響を受けた画家として、ラギオニが挙げているのはこの三人だけである。

ヴィムネは、お嬢さんとチェロ弾きの出会いのシーンについて「ドゥアニエ・ルソーの美学に借りた見かけの素朴さのなかで、衝動的な欲望の選択が宣言されている」<sup>36</sup>と解説している。ラギオニ自身もBenshi (弁士)<sup>37</sup>との対談で、映画を作るためのインスピレーションについて次のように述べている。

[...] 初期の作品では、ドゥアニエ・ルソーのような素朴派の画家たちに大きな影響を受けたと思います。その後、この影響力は落ち着きました、幸運なことに。あれは一種の誤魔化しでしたから。それからむしろ、デ・キリコやマグリットなどのシュルレアリスムの画家たちに影響を受けました。彼らは絵を語る方法を持っていました。絵画的でもあり文学的でもあったのです。<sup>38</sup>

また、ラギオニは、「遠近法を用いて描くことができる一方で、素朴派<sup>39</sup>の画家たちにも惹かれていた、素朴派風に(偽の素朴派の技術で)描くのは誠実ではないと感じ、次の作品からより遠近法を取り入れるようになった」とも話している<sup>40</sup>。また、ヴィムネの「描かれている絵柄に多くの異質な要素があること、植物が素朴派風でありながらシュルレアリスムにも傾いている」という指摘に対し、「素朴派といわれる絵に惹かれていたのは、幻想的だったからだが、そこには現実との断絶があった、素朴派の画家たちはそんなことは気にしていないしその結果奇妙で幻想的な次元が現れている」と素朴派の魅力と自分との差異について分析している<sup>41</sup>。

## 6 静止画

映画の1カット1カットが絵画的で、それを引き立てる波音とチェロの音だけの演出が美しいと思った。



絵が止めてみると絵画のようでおもしろいなあと  
思った。  
どこで止めても絵画作品として展示できそうな独特  
で綺麗なアニメーションだった。  
どのシーンも絵がとても素敵だ。  
私が想像していたアニメよりも筆のタッチが見える  
絵画のような作品で新鮮だった。  
絵本のような絵が可愛い。  
絵のタッチと動きが飛び出す絵本を見ているみたい  
で好きだ。  
人物の描き方が不思議な感じで面白くて好きです。  
絵が可愛くて不思議な感じがあってよかった。  
絵画がそのまま動いているような不思議な世界観  
だった。

Benshi (弁士) との対談のなかで、ラギオニは、「物語がどこからくるのかわからない、自分が私はまず第一に「絵を描く人 (dessinateur)」だからかもしれない」<sup>42</sup>と語っている。

また、17歳の頃の映画との出会いについて次のように語っている。

私が映画とはギャバンやゲイリー・クーパーのアドベンチャーとは別のものだと気づいた最初の作品、それは応用美術科の1年生のときに会った友人のおかげなのですが、彼は「ベルイマンの『第七の封印』を見に行くんだ」と言いました。私も一緒に行って、啞然としました。映画は絵画のような芸術だったのです。こうして、突然私は別の場所へと運ばれたのです。世界は途方もなく大きくなりました…。<sup>43</sup>

また別の箇所では、「もし漫画 (bande dessinée) に近い言語を映画編集の次元で見つけることができたらどんなによかったかと思う (…)ほとんど静止画で語れるようなものを」<sup>44</sup>とも言っている。ラギオニがめざしていたものはじつはすでに作品に現れているようにも思われる。学生はそれを感じとっているようにも思われる。

## 7 色彩

絵や物語がまさにシュールでとても衝撃だった。最初はそのことに気を取られていたが今回じっくり見ると色彩の美しさが際立っているなど感じた。晴れた時の淡い色や嵐の不気味さを感じさせる色など色の使い分けで場面がよく表現されていると思った。  
不安を煽るのが優れていると感じた。特に色使いが非常に奇妙で良いと思った。海の荒れが落ちていくからの色調はとても落ちていて良いと思った。登場人物のデザインが独特でまた背景の色彩も不思議な世界観を出していると思った。  
新しいアニメでは透き通ったような色が多いので不透明でもこもこしている感じが新鮮だった。映像の色彩も全体的にくすんだ色合いでどこか寂しい印象を受けたがそこがとても美しいと思った。キャラの感情やシーンの雰囲気、音、そして色で計算されながら作られているという印象を受けた。味のある深い色にチェロの音がとてもあっていて素敵だった。  
どの場面においても色彩豊かで美しかった。色づかいが日本だったらみられないような配色だったりして独特だと感じた。

最初、物語は白黒の世界から始まることになっていた。

私は最初の物語を、舞台芸術を学んでいたブランシュ通りの演劇芸術センター<sup>45</sup>での影絵芝居のために書いていました。そして友人のジャック・コロンバが紹介してくれたポール・グリモーにこのストーリーを見せました。色に焦点をあて、影絵の人物を配しました。どうしても思い出せませんが、彼らは色を失ってしまっていて、津波の後、気がついたら海の底にいる、そこはとてもカラフルな世界だったというものです。それから私は影絵をマリオンネットに切り替えました。私はこの芝居を『星釣り人 (Pêcheurs d'étoiles)』と命名していました。<sup>46</sup>

白黒の世界から一転して出現したカラフルな世界は

いかにも鮮やかに思われる。素朴派やシュルレアリストを思わせる色彩は、ラギオニの初期作品を特徴づけるものである。

ただ、作品を追うごとに少しずつ色は変化している。「新しいアニメでは透き通ったような色が多いので」と学生も言っているが、『お嬢さんとチェロ弾き』と同じエトルタを舞台とした（していると思われる）2016年の作品『冬のルイズ (Louise en hiver)』では、世界が淡いパステルカラーで描出されている。夏の最後の列車に乗り遅れ、ノルマンディーの避暑地にただ一人取り残されて、一冬を海岸で過ごすことになった老女の物語である。そして2019年の『王子の旅 (Le voyage du prince)』もまた然り。こちらはセピアがかったパステルカラーで、見知らぬ浜辺に漂着した年老いた王子の物語が展開する。色の変化は時代によるものなのか、ラギオニの年齢によるものなのか、この二作の老人たちには、静かで強靱な魅力が表出している。



『冬のルイズ』2016© 2016 JFL Films



『王子の旅』2019© 2019 JFL Films

## 8 切り絵

アニメーションだけど動きが人形劇みたいで面白かった。

紙のアニメーションのようだった。

切り取った絵をパーツごとに動かしているような妙な動きと立体感が面白いと思った。

絵のタッチと動きが飛び出す絵本を見ているみたいで好きだ。

波や風景の遠近のパーツを分けて動かしているのが面白く感じた。海の中の水の動きなどどうやって動かしているのか気になる。

映像は日本と違って切り取った絵を動かしているのになめらかなのにカクカクして見えるのが味があっていいなと思った。

改めて見ると人の腕の関節の動きや連動して動く手足がなめらかですごいなと思った。

水の揺らめきを紙を揺らして表現するのは今もたまに見かけるので、この頃から使われていたというのは驚きだ。

画風や人物の動きにアナログならではの味があらわれていて作品全体が不思議でどこか可愛い雰囲気になっているのが素敵だなと思った。





Jean-François Laguionie, 2016<sup>47</sup>

映画は、4枚の連続した静止画で始まる<sup>48</sup>。紙で切り取られた海である。そして、先に引用したように（「それから私は影絵をマリオネットに切り替えました」<sup>49</sup>）、人物はマリオネットが基本になっている<sup>50</sup>。ラギオニは以下のように語っている。

技術的には非常に初歩的なもので、紙の切り絵でした。波は大きな形にカットされていたので、横や上、下などにスライドさせることができました。感傷的な深みのないフラットな構成なので、二次元のアニメーションをスライドさせる手法はなかなかいいものだと納得しています。<sup>51</sup>

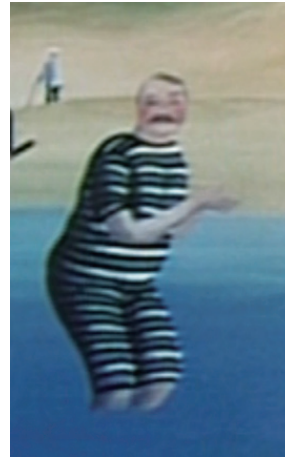
### 9-1 浜辺の登場人物：ポール・グリモー (1905-1994)<sup>52</sup>

私は元々ポール・グリモーが大好きなのだが、グリモーがスタジオを持っており、しかも他の作家がそこで作品制作をしているのに驚いた。（最初のクレジットを見て）

じつはこの『お嬢さんとチェロ弾き』の最終場面には、グリモーその人が登場している。

面白いのは、ジャン・フランソワ・ラギオニが、ビーチと海水浴客という、秩序正しく洗練された四角い最終空間

に、現実世界のキャラクターを初めて導入していることである…この映画のプロデューサーであるポール・グリモーそのひとである。口ひげを生やし、大きなストライプの水着に首をうめている。<sup>53</sup>



『お嬢さんとチェロ弾き』1965



ポール・グリモー (1961)<sup>54</sup>

仲間であり、先輩であり、この映画のプロデューサーでもあるポール・グリモーへのオマージュだろうか。ヴィムネはこの登場について「親しいウインクのようなものだ」<sup>55</sup>と述べている。

ヴィムネはまた、この浜辺に、エミール・レイノー(1844-1918)<sup>56</sup>による無声アニメーション映画『キャビンの周り、あるいは海水浴場での伊達男の災難 (*Autour d'une cabine ou Méaventure d'un copurchic aux bains de mer*)』(1897)に現れる、19世紀末の海水浴場のキャビンが見られることを指摘している<sup>57</sup>。このレイノーの短編映画の背景が、『お嬢さんとチェロ弾き』と同様、エトルタの海岸を彷彿させるものであることも付け加えておきたい<sup>58</sup>。

ところで、登場している実在の人物は、ラギオニと同時代のグリモーだけではない。19世紀末の人物も紛れ込んでいる。若き日のマルセル・プーレストである。

## 9-2 浜辺の登場人物：マルセル・プーレスト (1871-1922)<sup>59</sup>

浜辺の中央あたり、少し陰になっているところに、ラケットとテニスボールを手にしてキャビン(移動式着替え室)の傍に立っている男がいる。なにかそぐわない奇妙な存在感を放つこの人物には、20世紀を代表する作家、マルセル・プーレストの面影が認められる。



『お嬢さんとチェロ弾き』1965



21歳のマルセル・プーレスト (1892)<sup>60</sup>



カブールのマルセル・プーレスト (1896)<sup>61</sup>

19世紀末のノルマンディー、ブルターニュの海辺の避暑地にかかわる作家といえ、フランス人がまず思い浮かべるのはマルセル・プーレストだろう。プーレストは、19世紀末から20世紀初めにかけて、ノルマンディー、ブルターニュの避暑地を毎夏のように訪れている。書簡にも、ノルマンディーのディエップ、ウルガット、カブール、トゥルーヴィル、そ



して『お嬢さんとチェロ弾き』の浜辺のモデルと考えられるエトルタ、あるいは、ブルターニュのベル・イル、フィニステール、バグ・メイユ等の地名を確認することができる。そしてその作品『失われた時を求めて』第二巻『花咲く乙女たちのかげに』は、ノルマンディーの架空の避暑地バルベック（カブールをモデルとしていると考えられる）を舞台に展開する。このラギオニの浜辺には、もしかしたら他にも実在の人物が紛れ込んでいるかもしれない。そう思っていると、どの人物もなにやら怪しく感じられる。一方で、登場しているのは、実在の人物だけではない。

### 9-3 浜辺の登場人物：三美神

二人が再び海面上がった時にこちらを見ていた三人の女性は三美神がモデルかなと思った。



『お嬢さんとチェロ弾き』1965

「三美神」とは、ヘシオドスの『神統記』（BC700年頃）に現れる生命の全容を擬人化した女神「カリスたち（Χάριτες）」である。また同じギリシャ神話の「パリスの審判」から、ヘラ、アテナ、アプロディーテも「三美神」として認識されている。これは、ローマ神話の、ユノ、ミネルヴァ、ウェヌスに引き継がれることになる。

美しい三人の女性像となれば、芸術の領域では

うってつけのモチーフである。女神たちは、ルネサンス期以降、連綿と描かれて続けていく。たとえば、ボッティチェリの『プリマヴェーラ』に描かれる「三美神」や、ラファエロの「三美神」など、即座に思い浮かぶだろう。そのような美術史の流れのなかに、この浜辺の三人の娘たちを位置付けてみたい。



ボッティチェリ『プリマヴェーラ』(1482頃)  
ウフィッツィ美術館<sup>62</sup>

15世紀末、ボッティチェリの『プリマヴェーラ』である。左手手前に、「三美神」が配されている。左から、「愛欲 (voluptas)」、「慎み (castitas)」、「美 (pulchritude)」をあらわしているとされている<sup>63</sup>。



ラファエロ・サンティ 『三美神』(1503-1504)  
コンデ美術館<sup>64</sup>

16世紀に入って、ラファエロによる『三美神』である。この三柱は、従来、カリスたち（アグライアー、エウプロシュネー、タレイア）とされてきた。1930年、パノフスキーは、それぞれが黄金の林檎を手にしていることから、彼女たちはヘスペリデスの園を守るヘスペリスたち（ヘスペリデス Ἑσπερίδες）であるとした<sup>65</sup>。これについて、1986年のフランス美術館研究修復センターC2RMF（Centre de Recherche et de Restauration des Musée de France）による下絵調査では、林檎を持っているのは左側の女神だけだったので、元々は「パリスの審判」のシーンであったが、最終的には不死の林檎を差し出すヘスペリデスとなったとしている<sup>66</sup>。ほかにも左から順に女性の成長段階を表しているという説<sup>67</sup>、ヴィーナスの侍女たちと見立てる説<sup>68</sup>などもある。



ルーカス・クラナッハ（父）  
『三美神』(1531)  
ルーヴル美術館<sup>69</sup>

同じく16世紀、ルーカス・クラナッハ（父）による『三美神』である。独特の美しさが感じられる。ポーズと持ち物から左から、アテナ（ミネルウァ）、アプロディーテ（ウェヌス）、ヘラ（ユノ）と考えられる。



アントニオ・カノーヴァ 『三美神』(1813-1816)  
エルミタージュ美術館<sup>70</sup>

19世紀、アントニオ・カノーヴァによる『三美神』である。左から、エウプロシュネー、アグライア、タレイアとされている。ただしそのポーズと纏われた布から、アテナ（ミネルウァ）、ヘラ（ユノ）、アプロディーテ（ウェヌス）と見ることもできる。



マイヨール 『三美神』(1938) テュイルリー公園<sup>71</sup>

20世紀に入り、マイヨールによる三美神である。20世紀のこの三美神はもはやアトリビュートをもっていない。匿名の三人の美しい女性である。





『お嬢さんとチェロ弾き』1965

そして、ラギオニの浜辺の三人の娘たちもまた、もはや名前を持っていない。



ニキ・ド・サンファール 『三美神』 1994年<sup>72</sup>

20世紀から21世紀へと、「三美神」ははじける。ニキ・ド・サンファールによる『三美神』は、豊満な、白い女と、黄色い女と、黒い女である。ニキ・ド・サン・ファールは、1994年のこの作品以降、1995年から2002年にかけて、さらにはその死後も現在に至るまで、世界各地で「三美神」を展開していくことになる。



New York Ave Sculpture Project (1999)<sup>73</sup>

20世紀に女神は人となる。そして21世紀に向かって、巨大化し三つの肌の色と自由を謳歌する。ラギオニのアニメーションの最後のシーンに登場する三人の娘たちは、このような美術の歴史の流れの中に気負いなくさりと存在している。

この三人の娘たちほどは目立たないが、浜辺にはもう一組、神話に想を得たと考えられる三人の女たちがいる。

#### 9-4 浜辺の登場人物：モイラ、パルカ、あるいはノルン



『お嬢さんとチェロ弾き』1965

水際で輪になって手を取り合う娘たちに対するかのような、浜辺で編み物をする三人の老女たちがいる。この老女たちについても、「三美神」と同様、その起源をギリシャ神話の「モイラ」あるいはローマ

神話の「パルカ」に遡ることができるように思う。  
「モイラ (Μοῖρα)、複数形、モイライ (Μοῖραι)」は、ギリシャ神話の運命の女神であり、紡ぐ者である「クロトー (Κλωθώ)」、測る者である「ラケシス (Λάχεσις)」、断ち切る者である「アトロポス (Ἄτροπος)」の三姉妹とされる。フランス文学においてこの三姉妹が最初に認められるのは、おそらく、『薔薇物語』(1230-1280頃) 後編第10章「ゲニウスの説教」においてであろう。

ご存じなければお知らせしますが、3人の姉妹がいて、そのうち2人があなたを援助してくれるのです。3人目だけが害をなします。あらゆる生命を縮めてしまうのです。ご承知おきください。つむ竿をもったクロトは、糸を巻くラケシスと共に、あなた方を大いに励ましてくれます。しかしアトロポスはこの2人の姉妹が紡ぎ出す全てを断ち切り、引き裂きます。あなた方を欺こうとしています。深く穿たないと、あなた方の家系全員が埋められてしまうでしょう。またアトロポスはあなた自身をつけ狙っています。これほどたちの悪い動物は見たことがないし、あなた方にとってこれほどの強敵は存在しません。[…]クロトとラケシスを助け、もしあの賤しいアトロポスが糸のうちの6本をきったら、12本が出てくるようにしてください。自分たちの数を増やすことを考えるように。そうしたら、何もかも邪魔しようとする、あの邪悪で強情なアトロポスを騙すことができるでしょう。[…]

この不幸で惨めな女(アトロポス)は生命に対して戦いを挑み、死人が出ると嬉しくてたまらないという心の持主で、ケルベロスの飼主です。<sup>74</sup>

エヴラール・ド・コンティが、後に、この『薔薇物語』をリライトして、『チェス 愛の教訓』(1390頃)<sup>75</sup>を著す。その100年後にロビネ・テスタールが手掛けた写本、『チェス 愛の教訓』(1496-1498)のなかにモイラたちの姿を確認できる。



ロビネ・テスタールによる写本『チェス 愛の教訓』<sup>76</sup>より、「モイラたち：クロトー、ラケシス、アトロポス」<sup>77</sup>

左から順に紡錘をもつ「クロトー」、糸を測る「ラケシス」、それを断ち切る「アトロポス」とわかる。



作者不詳『死の勝利 あるいは 運命の三女神』(1510-1520) ヴィクトリア&アルバート美術館<sup>78</sup>

この三柱の名前が記されている16世紀のフランドルのタペストリーである。左から順に「アトロポス」、「ラケシス」、「クロトー」と読みとることができる。ペトラルカ(1304-1374)による『凱旋』<sup>79</sup>(1351-1374)から、「死の凱旋」の場面を表したタペストリーの断片ということである<sup>80</sup>。倒れて死んでいるのは、ペトラルカが一連の恋愛詩を捧げたと言われる「ラウラ」とされている。ただし、「死の凱旋」のテキストの方には、「アトロポス」、「ラケシス」、「クロトー」の名前はなく、大文字の「運命Fortuna」と「死神Morte」が死を導いている<sup>81</sup>。





ジョン・メルフィシュ・ストラドウィック 『黄金の糸』  
(1885) テート・ブリテン<sup>82</sup>

19世紀末の英国では、たとえば、ラファエル前派の画家ジョン・メルフィシュ・ストラドウィックによる『黄金の糸』がある。左から順に糸を測る「ラケシス」、断ち切る場所を見据えている「アトロポス」、紡錘をもつ「クロトー」と見ることができる。

このギリシャ神話の「モイラ」に対応する（同一視される）のが、ローマ神話の運命の女神「パルカ (Parca) 複数形、パルカエ (Parcae)」である。紡ぐ者が「ノーナ (Nona)」、測る者が「デキマ (Decima)」、断ち切る者が「モルタ (Morta)」である。



フランチェスコ・バッキアッカ (1494-1557)  
『三人のパルカ』 カ・レッツォーニコ (ヴェネチア)<sup>83</sup>

16世紀、ルネサンス期イタリアの、マニエリスムの画家バッキアッカによる「パルカたち」である。

左から紡錘を持っているのがノーナ、中央で鋏を入れようとするのがモルタ、糸を手にとっているのがデキマであろう。



ピーテル・パウル・ルーベンス 『マリー・ド・メディシスの運命』(1622-1625) ルーヴル美術館<sup>84</sup>

17世紀フランス、ルーベンスの連作『マリー・ド・メディシスの生涯』にもパルカたちは登場している。第一番目の作品『マリー・ド・メディシスの運命を紡ぐパルカたち』である。右上にユピテルとユノその下にノーナ、デキマ、モルタが続いている。ただし、マリーの栄光の生涯の始まりに、糸を断ち切る鋏は描きこまれていない。



フランシスコ・デ・ゴヤ 『アトロポス、あるいは、パルカたち』(1819-1823) プラド美術館<sup>85</sup>

19世紀スペイン、ゴヤによる『アトロポス、あるいは、パルカたち』である。ギリシャ神話の「アトロポス」とローマ神話の「パルカたち」がタイトルに混在している。「パルカたち」であれば、腕を背中

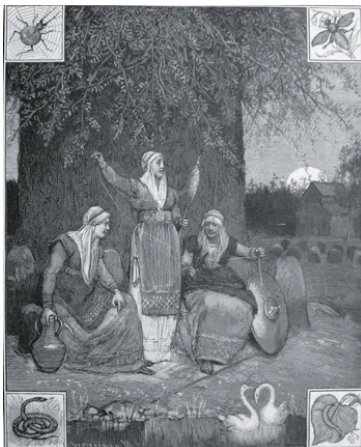
にまわした男の周りに、左から順に、ノーナ、デキマ、モルタとなる。フランス語のタイトルは『モイラたち (Les Moires)』となっている。



アルフレド・アガシュ 『パルカたち』(1885頃)  
リール宮殿美術館<sup>86</sup>

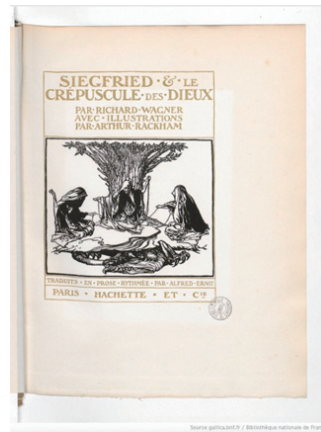
19世紀フランス、アルフレド・アガシュによる『パルカたち』である。右から順にノーナ、デキマ、モルタとなる。ただし、ドイツ語タイトルは『ノルンたち (Die Nornen)』となっている。

「ノルン (Norn) 複数形ノルニル (Nornir)」は、北欧神話の運命の女神である。巨人族の三姉妹、「ウルズ (Urðr)」、「ヴェルザンディ (Verðandi)」、「スクルド (Skuld)」を指すことが多いという。ユグドラシルの木にウルズの泉の水をかけて育てているとされている。



H.B.ハンセン  
『ウルズの泉のノルン  
たち』(1893) 木版画<sup>87</sup>

19世紀、スウェーデン、L.B.ハンセン<sup>88</sup>『ウルズの泉のノルンたち (Nornorna vid Urdarbrunnen)』(『ユグドラシルで運命の糸を紡ぐノルンたち (Nornorna spinner ödets trådar vid Yggdrasil)』)である。中央のノルンが紡ぎ棒をもち、右側の黒い衣装のノルンが鋏をもっていることがわかる。



アーサー・ラッカム 「グラム！グラム！夢見る剣よ！」  
(1910)<sup>89</sup>

20世紀初頭、英国においてもノルンたちは登場する。挿絵画家アーサー・ラッカムによる『ニーベルングの指環』の挿絵(口絵)から「グラム！グラム！夢みる剣よ！(運命の糸を紡ぐノルンたち)」である。『ニーベルングの指環』4部作(1848-1874)の第4作、『神々の黄昏』の序章は、過去、現在、未来を語る3人のノルンたちによって始まる。





ハインリヒ・フュースリ 『3人の魔女』(1783)  
チューリヒ美術館<sup>90</sup>

過去、現在、未来を語る魔女たちといえば、遡って17世紀の英国、シェークスピアの『マクベス』(1606頃)は外せないだろう。なるほど、『マクベス』の舞台はスコットランドである。冒頭に「きれいは汚い、汚いはきれい」と乱舞し、その後、マクベスの過去、現在、未来を予告する三人の魔女にも、この北欧のノルンたちが反映されているとされている。18世紀、ハインリヒ・フュースリがこの三人の魔女を描いている。



アンカー・エリ・ピーターソン  
「ノルンたちと世界の木」(2003)<sup>91</sup>

さて、21世紀、デンマーク、フェロー諸島の切手にもノルンたちが現れる。アンカー・エリ・ピーターソンによる「巫女の予言」シリーズから「ノルンたちと世界の木」である。21世紀のノルンの世界はなにやら優しげである。

このような背景のなかで、1965年にラギオニがノルマンディーの夏の海岸に出現させた編み物をする三人の老女たちは、どこかコミカルで、しかし三人の娘たちよりは年齢の分だけ少し強そうである。ヨーロッパの人々は、この老女たちに、ギリシャ・ローマの、あるいは北欧の神話に遡る、現代の運命の女神たちの姿を認めるのではないだろうか。



『お嬢さんとチェロ弾き』1965

一方、私がこの三人の老女から思い浮かべたのは、ヨーロッパの伝統的な三柱の女神よりも、『崖の上のポニョ』(2008)に登場する3人の老女、トキさん、ヨシエさん、カヨさんであった。実際、一番奥の黒い服を着ている婦人はトキさんのようにも見える<sup>92</sup>。



『崖の上のポニョ』2008<sup>93</sup>

運命の糸を紡ぐモイラ、パルカ、そして北欧神話のノルンは、20世紀のラギオニのアニメーションの



なかの三人の編み物をするちょっと強そうな匿名の老女たちと重なる。また、21世紀の宮崎駿の世界の、三人の老女たちとも重なって見える。宮崎駿の世界で彼女たちは再び名前を獲得している。

画像一番手前、一人、憎まれ口を叩く我が儘老女にしか見えないトキさんは、最初、ポニョを見て人面魚のもたらす災厄を予告し、最後には、未遂に終わるが(宗介のこを守ろうと)、ひまわり荘へと向かう宗介とポニョの行く手、つまりは二人の未来、二人の運命を断ち切ろうとして、老女ならざる力を発揮する。その役割は、「断ち切る者」であるアトロポス(モルタ)のものでもあるように思う。ただしやさしい現代版のアトロポスは彼らの未来を断ち切ることはない。そういえばポニョの物語もハッピーエンドの『人魚姫』であった<sup>94</sup>。

一見秩序だった19世紀末の浜辺には、神話の時代の女神たちの寓意が認められ、そこに19世紀末の若き日のブルースト、1965年当時のラギオニの同業者であるグリモーが、時空を超えて違和感なく混在している。その空間は、それを観る鑑賞者にとっては、閉じられたものではなく、21世紀の現代のアート(たとえばニキ・ド・サンファール)、アニメーション(たとえば宮崎駿)へと連なっている。

## 10 エンディング

男の人が楽器を弾いて女性の気を引こうとしたのだろうが私には楽器を弾くことで高波を起こしてこっちに来させようとしているように見えて最悪な奴やなと感じてしまう。全体的に曲も暗くて摩訶不思議すぎる。でも時代を感じさせない技術力は圧巻です。

不幸を呼び寄せるチェロは何を表していたんだろう。大事なものは一つしか手に入らないよってことだろうか。

チェロに運命を左右された二人が最後に絵画のモデルを集めたような浜辺に行き着き逃げのように去っていくラストシーンが印象的だった。世界観の設定をもっと詳しく知りたい。

恋物語なのかホラーなのか簡単には理解できない不思議な話だった。

最後二人の登場人物が海の中に潜っていったのはなぜだろうと思った。

最後のシーンはよく意味が読み取れなかったけどどこことなく悲しいというか寂しい感じがした。

二人がどうなったのか気になる。


展開が全く読めなくて面白かった。けれど登場人物の気持ちを読み取るのは難しいと思った。

砂浜で多くの人に見られて人目を避けるように浜に上がっていったのは何かの暗示なのだろうか？  
シュール!!!

二人は最後多くの人目から逃れるように海岸に着いたのが現実から逃げているように見えた。

最初の方は見てもどんなことを伝えたい作品なのかわからなかったけど納得がいった。

二人が海から上がってハッピーエンドかと思いきや、また海の中に戻ってゆくエンディングがなんとも言えず良い。

チェロの音楽が波の動きと合わさって波を操っているようで綺麗だと思った。ラストシーンに二人が身を隠す場面も可愛かった。

二人を時間も空間も超えた見知らぬ土地へと導いた...

水中と地上の世界が分かれてしまったこと、もう戻れないと悟った二人を感じて少し悲しく思った。

チェロ弾きと魚をとる女性はもうすでに亡くなっていると解釈した。

ストーリー的にはオチがいまいちわからなかったので私的に解釈するとチェロ弾きとお嬢さんが海に沈んだ時点で二人は死んでいて、その後に行われる出来事は全て二人の頭の中だけのことで実際には生きていてやっていることだとは思えなかった。

人物に台詞を当てないことで見る人に物語を想像させるようになっているのかと考えた。

物語の場面を説明する言葉、文章、会話すらないのが面白い。人物の気持ちを状況を理解しながら想像していくので物語に入り込める。

1回目はストーリーに集中してじっくりみられなかったところも2回目はみられた。最後のオチがシュールで好きです。

感想にもあるように、台詞がないことで見る人に物語を想像させてくれているとも言える。その結果、「理解できない不思議な話だった」、「なぜだろうと思った」、「二人がどうなったか気になる」、「難しい」、「逃げているように見えた」、「わからなかったけど納得がいった」、「もう戻れないと悟った二人を感じて悲しく思った」、「なんとも言えず良い」、「亡くなっていると解釈した」「二人は死んでいて、その後に行われる出来事は全て二人の頭の中だけのことで実際には生きていてやっていることだとは思えなかった」と、エンディングについては、いろいろな感想が出てきた。ヴィムネは、以下のように解釈している。おそらくこれが正解だろう。

『お嬢さんとチェロ弾き』は、さりげなく、二人の恋人が二人の神聖な祖先の足跡を辿り、一刻も早く逃亡するようにと促しています。幸せに生きるためには、大好きな人たちから遠く離れても隠れて生きる方がいいと言っているのではないのでしょうか？<sup>95</sup>

しかし、「もうすでに亡くなっている」「海に沈んだ時点で二人は死んでいて」という解釈もあっていいように思う。こちら側（此岸）ではなく、あちら側（彼岸）の世界を二人は選んだのだから。あるいはまた、『ひょっこりひょうたん島』の「サンデー先生と5人の子供たちは最初にひょうたん島に遠足に行った時点で火山の噴火に巻き込まれて死んでしまっている。ひょうたん島の世界は死後の世界である」<sup>96</sup>という都市伝説を思い出す（私は最近までこの話を信じていた）。そのような妄想（想像）が広がってゆくのも作品の魅力だろう。

ただ、解釈はどうあれ、このプロットの誕生についてはもっと単純なものだったらしいことが、ヴィムネとラギオニとの対談から見えてくる。ヴィムネが、「どこからともなく、いやポランスキーの作品のように、ありえないような海底からお嬢さんとチェロ弾きが出現する」<sup>97</sup>と述べているのに対し、ラギオニは次のように回想している。

ある日、シネマテークで、私たちは少し早めに映写室に入ったのですが、そこではポランスキー<sup>98</sup>がプライベートでマルセル・マルソー<sup>99</sup>に『二人の男とタンズ』<sup>100</sup>あるいは『太った男と痩せた男』を見せていました。まだ音は入っていませんでした。私たちは無声で映画を見ました…最後に二人の男はタンズを抱えて海に沈んでいきました…ポランスキーは私には特別な存在（私のパンテオン）です。<sup>101</sup>



『お嬢さんとチェロ弾き』1965



『二人の男とタンズ』(1958)<sup>102</sup>

『二人の男とタンズ』は、ポランスキーの映画学校卒業制作ということである。15分ほどのほとんど台詞らしい台詞のない短編映画だが映像には強度がある。見始めると見入ってしまう。画像は二人の男がタンズを抱えて海から上がってくる映画冒頭のシーンである。

海から上がってきた二人はタンズを抱えて街中を

彷徨するが、そこにタンスと彼らの居場所はなく、再び海へかえっていく。『お嬢さんとチェロ弾き』は、ストーリーより前にこのシーンがまずあったのかもしれない。

黒澤明が『八月の狂詩曲』(1991)<sup>103</sup>の撮影について、「原作の『鍋の中』(1987)<sup>104</sup>のおばあちゃんが傘をさして豪雨の中を走っていく最後のシーンが目に浮かんだ、そのシーンを撮りたいと思った、その最後のシーンに向かって映画を撮影した」<sup>105</sup>と語っていたが、そんなふうに、タンスが海から上がってくる映像がラギオニの脳裡にあったのかもしれない。二人の男とタンスのように、恋人たちも海から上がった浜辺には居場所はなく、海へと戻っていくことになる。


『二人の男とタンス』は、ポランスキー、25歳のときの卒業制作、『お嬢さんとチェロ弾き』は、ラギオニの、26歳のときのデビュー作品である。ポランスキーは現在88歳、2019年にドレフュス事件を主題とした『我、弾劾す (J'accuse)』を発表している。ラギオニは82歳、2019年に『王子の旅 (Le voyage du prince)』を発表し、現在は、1898年スプレー号で世界初の単独世界就航を果たし1909年海上で消息を絶ったスローカム<sup>106</sup>をモデルとした作品を準備中とのことである。

#### 学生の感想

- ・映画の1カット1カットが絵画的で、それを引き立てる波音とチェロの音だけの演出が美しいと思った。セリフがないので不思議さがより際立つ。解釈が難しいけれどチェロに運命を左右された二人が最後に絵画のモデルを集めたような浜辺に行き着き逃げるように去っていくラストシーンが印象的だった。世界観の設定をもっと詳しく知りたい。
- ・少し悲しい音楽が映像にととても合っていると感じた。映像の色彩も全体的にくすんだ色合いでどこか寂しい印象を受けたがそこがとても美しいと思った。カモメが飛んでいる場面は無音だったが羽を羽ばたかせている様子を見ていると鳴き声が聴こえてくるような気がした。
- ・波や風景の遠近のパーツを分けて動かしているのが面白いと感じた。海の中の水の動きなどどうやって動かしているのか気になる。音楽と動画が待ちしていてゆったりとした時と緊張感のある時とのメリハリがすごくクジラ(?)とカニの戦闘やたくさんの人が二人を見つめている場面は自分もドキドキして時が止まったように感じた。
- ・画風や人物の動きにアナログならではの味があらわれていて作品全体が不思議でどこか可愛らしい雰囲気になっているのが素敵だなと思った。
- ・登場人物が何も話さないところが映像に不思議な凄みを付け加えているんだなと思った。
- ・不思議な作品だと思った。人物や背景がルネ・マグリットの絵のようだからそう感じたのかもしれない。チェロ弾きと魚をとる女性はもうすでに亡くなっていると解釈した。人物や波はどのように動かしているのか知りたい。
- ・男の人が楽器を弾いて女性の気を引こうとしたのだろうが私には楽器を弾くことで高波を起こしてこっちに来させようとしているように見えて最悪な奴やなと感じてしまう。全体的に曲も暗くて摩訶不思議すぎる。でも時代を感じさせない技術力は圧巻です。(油画)
- ・海の中の魚の動きや出てくるところで「ポニョ」を思いでした。(彫刻)
- ・描いた絵というよりは切り絵が動いているような表現の技術がすごいと思った。色彩が美しくどの場面を切り取ってもポストカードにできるとおもった。けどやはりストーリーが難解だったり音楽が陰鬱で全体的に不気味な印象を持った。
- ・不幸を呼び寄せるチェロは何を表していたんだろう。大事なものは一つしか手に入らないよってことだろうか。
- ・フランスの映像作品は静けさの音があるような気がする。チェロの音が波の音、静けさに音響のこだわりを感じる。重めのゴツイ音楽と、絵とストーリーのコミカルさのギャップがなんとも言えないおかしさ(シュールっていう言葉があっているような気がします)を生んでいると思う。コメディ。
- ・登場人物のデザインが独特でまた背景の色彩も不思議な世界観を出していると思った。セリフはないけれど緊迫したシーン、盛り上がりをも曲の感じを出している




素敵だった。

- ・改めて見ると人の腕の関節の動きや連動して動く手足がなめらかですごいなあと思った。1回目はストーリーに集中してじっくりみられなかったところも2回目はみられた。最後のオチがシュールで好きです。
- ・お嬢さんへのかなわない愛を暗いハーモニーの曲で海に向かって弾きだしたチェロ弾き。あまりにも重い愛を歌ったから海が「もう何もかも壊してしまえ！」と言わんばかりに荒れ狂い二人を海へ誘い途方も無い海の旅をさせた。ついにはチェロに穴をあけてチェロを弾けなくし、二人を時間も空間も超えた見知らぬ土地へと導いた…（ビーチには知らない人しかいない）にとや生き物が手前、奥の動きがなく、の左右の動きの中で全ての動きを出しているところが面白かった。その点で弦楽器のボーイングの動きにぴったりだと思った。曲は怖いけれど世界観が独特で引き込まれた。
- ・切り取った絵をパーツごとに動かしているような妙な動きと立体感が面白いと思った。魚の口からドリル(?)が出てくる発想、チェロ弾きの男は間抜けなのか運が良いのか、そして最後の沈黙の時間など、不思議な雰囲気の作品だと思った。
- ・アニメーションだけ動きが人形劇みたいで面白かった。新しいアニメでは透き通ったような色が多いので不透明でもこもこしている感じが新鮮だった。
- ・ストーリーは全くわからなかったがとてもインパクトのあるアニメーションで前期一度見てから何度も思い出して見たいと思っていた。背景も登場人物も魚たちもデフォルメちっくなのに動きがとてもリアルで不気味だけど引き込まれた。
- ・恋物語なのかホラーなのか簡単には理解できない不思議な話だった。不気味な作画は現代絵画でよく見かけるようなタッチだった。
- ・言葉はないけれど映像と音楽だけで面白いし話も謎でなぜか笑えて面白かった。映像は日本と違って切り取った絵を動かしているのでなめらかなのにカクカクして見えるのが味があっていいなと思った。
- ・二人が海から上がってハッピーエンドかと思いきや、また海の中に戻ってゆくエンディングがなんとも言えず良い。私たちが見慣れたアニメーションとは違うけれどこのアナログさが素敵。
- ・低音から高音へ音楽が変わり場面も変わるところが不安さと高揚感が感じられてよかった。水の中で二人は

また別れまた会うまでユーモアがあって面白く感じた。水中と地上の世界が分かれてしまったこと、もう戻れないと悟った二人を感じて少し悲しく思った。絵が可愛くて不思議な感じがあってよかった。

- ・見ていて不安な気持ちになるがとても引き込まれてしまう。怖いのに少し笑えるのが良い。どのシーンも絵がとても素敵だ。とにかく女性はお気の毒だなあと考えた。
- ・絵の感じがルソーみたいで夢のような風景だけど少し不安になる画だと思った。最後二人の登場人物が海の中に潜っていったのはなぜだろうと思った。
- ・私は元々ポール・グリモーが大好きなのだが、グリモーがスタジオを持っており、しかも他の作家がそこで作品制作をしているのに驚いた。(最初のクレジットを見て)以前授業で流した時が初めてラギオニさんの作品を見る機会だったのだが、絵や物語がまさにシュールでとても衝撃だった。最初はそのことに気を取られていたが今回じっくり見ると色彩の美しさが際立っているなと感じた。
- ・最初から雰囲気が悪い。海面の波の表現が秀逸だと思った。シンプルだけど迫力があって引き込まれた。個人的には赤い海底のシーンが好き。
- ・独特な雰囲気が癖になる映画だなと思わされる。映像の授業で作る作品にも使えないかと考えている。音声がないという点においても映像の持つ特有な空気感を一層際立たせていて色々学ぶものがある。
- ・物語の場面を説明する言葉、文章、会話すらないのが面白い。人物の気持ちを状況を理解しながら想像していくので物語に入り込める。絵本のような絵が可愛い。晴れた時の淡い色や嵐の不気味さを感じさせる色など色の使い分けで場面がよく表現されていると思った。
- ・不安を煽るのが優れていると感じた。特に色使いが非常に奇妙で良いと思った。海の荒れが落ち着いてからの色調はとても落ち着いていて良いと思った。
- ・海鳥が空を飛ぶ様子(風にあおられながら)、魚が海を漂う様子、食べようとする様子など、動きと静止のタイミングがとてもリアルでとてもよく観察されたのだろうなと感動した。海の波の表現も独特でありながらも作風に合致していると思う。
- ・海の波に女性とチェロ弾きがさらわれるシーンは不安な気持ちになったかが、どの場面においても色彩豊か

で美しかった。二人が再び海面に上がった時にこちらを見ていた三人の女性は三美神がモデルかなと思った。とても面白かった。

- ・海の中というのが画像の中だと魚で表されていて普通に見ていたら地上っばい(海の中も)。結局チェロ弾きと女性の関係はなんだったのか…(恋?) 砂浜で多くの人に見られて人目を避けるように浜に上がっていったのは何かの暗示なのだろうか? シュール!!!
- ・音楽のせいか全体的に怖い雰囲気があった。崖の上だったり海の中だったりよくわからない構成だけど、場面が切り替わるきっかけはわかりやすく面白かった。海に助けに行く時も、巨大なカニ? を追いかける時もチェロを持って行くのに最後手を引っ張られて海から出るときはチェロを放って行くのが愛情の見えるストーリーになっていて最初の方は見ていてもどんなことを伝えたい作品なのかわからなかったけど納得がいった。
- ・チェロを弾くと魚が集まってきてそれ以降も魚がチェロについて行くところが面白いと思う。チェロのおかげで男性は命拾いをしていて危機一髪だったし良いタイミングで大きい魚から逃れられているのが気持ちよかった。
- ・全体として不思議な雰囲気の作品だと思った。男の人はそれまでずっとチェロを持っていたのに最後はチェロを探すこともやめてチェロを気にしていない様子に見えたのがどういう意味なのかなと思った。二人は最後多くの人の目から逃れるように海岸に着いたのが現実から逃げているように見えた。
- ・BGMがわりに重低音で常に流れていたのどにかく怖かった。ストーリー的にはオチがいまいちわからなかったので私的に解釈するとチェロ弾きとお嬢さんが海に沈んだ時点で二人は死んでいて、その後に行われる出来事は全て二人の頭の中だけのことで実際には生きていてやっていることだとは思えなかった。
- ・変な魚? とカニが戦っているところに男がずっと入っていったところが面白かった。全体的に効果音が大胆で笑ってしまいそうになる。静止画のところはジワジワ笑える。キャラクターの表情が穏やかで逆に怖かった。
- ・チェロの音楽が波の動きと合わさって波を操っているようで綺麗だと思った。 ラストシーンに二人が身を隠す場面も可愛かった。

- ・音楽がとても美しくそれにアニメーションが合わさる構成に作品をしてとても洗練された印象を感じた。人物に台詞を当てないことで見る人に物語を想像させるようになっているのかと考えた。シュールにデフォルメされた登場人物たちが個性的な動きを見せるがその中で女性らしさや男性らしさ、時には不気味さを感じさせられて惹きつけられた。私は男女の関係についてロマンスなどとは別に得体の知れない不安感や違和感を感じるのだがこの作品はあくまでお嬢さんとチェロ弾きはお互いを愛しているのかも知れませんが第三者の目線からそのような不思議な雰囲気を表現しているのではと感じた。
- ・絵のタッチと動きが飛び出す絵本を見ているみたいで好きだ。小魚の動きや水中の揺らめきを、間に透明フィルムを挟んだような表現で表しているのがとてもリアルだと思った。最後のシーンはよく意味が読み取れなかったけどことごとく悲しいとか寂しい感じがした。
- ・最初の方は効果音的なものはほとんどなくて、波の音、風の音、チェロの音が主であって、物語を想像させるものだなと思った。物語が進むにつれ効果音が多くなって、自然の音(波、風)が少なくなって臨場感があるように感じ、これは意図しているものだと思うのでそれによって良い感じになっている気がした。後人物の描き方が不思議な感じで面白くて好きです。
- ・ルソー的なえ、詩的な動く絵本、悲観的な音楽(起伏のある)。人間的な愛情の側面、世界の転換と、住む場所が違うために逃げるような描写など、すごいメタ的に最初の主人公が変わっているような気がする。
- ・デ・キリコやアンリ・ルソー、シュルレアリスムの作品群を思わせるカットが動いている点に驚いた。僕たちはジブリの名作に触れて育ってきたけど国際文化交流を積極的に捉えるならばこうした海外のアニメーションがもっと日本で見られても良いのではないだろうか。イラストレーション、アニメーション、音楽…その全てが子供達にとって刺激的に映るだろう。
- ・冒頭の波の描写やチェロ弾きの演奏を見て、「音楽に合わせて絵が動く」ということに対する喜びを強く感じた。キャラクターの動きが単調だからこそ音による演出のキレが際立っていたように思った。キャラの感情やシーンの雰囲気が、音、そして色で計算されながら作られているという印象を受けた。



- ・波の演出がおもしろかった。絵が止めてみると絵画のようでおもしろいなあとと思った。チェロが不穏をもたらすのかな？ おもしろかったです！
- ・ちょっと初めの方こわかった。海の波が何層にもなって奥行きが出されている表現には北斎の富嶽三十六景にも同じような表現があったな—と思った。意味がわからん！—と思いながらも面白かった。
- ・色づかいが日本だったらみられないような配色だったりして独特だと感じた。最後二人がどうなったのか気になる。波の音が好きだった。
- ・展開が全く読めなくて面白かった。けれど登場人物の気持ちを読み取るのは難しいと思った。海の中の動きが良かった！！
- ・カニとシーラカンスの戦いが面白かった。(シーラカンスではなくて一角)
- ・不安を掻き立てるような動きと配色ですごくドキドキした。
- ・不思議な世界観ではあったが、とにかくこわかった！理由が特にないのみにみていて心がざわざわして落ち着かなかった。けどなんだか気になる作品だった。
- ・音楽とアニメが合っていてセリフはないけど人物たちの気持ちなどわかりやすく面白かった。(
- ・今のアニメとは違ったアナログ感が、作品の不気味さを引き立たせていて、ずっとドキドキしながらみていた。シュールで世界観のある作品で面白かった。
- ・シュールで非現実的だったけれど海の中の描写が面白かった。水の揺らめきを紙を揺らして表現するのは今もたまに見かけるので、この頃から使われていたというのは驚きだ。
- ・台詞のないアニメーションで普段の見慣れたものと違い新鮮だった。音楽と映像で紡がれたストーリーに惹きつけられた。
- ・冒頭の波とチェロのBGMが緊張感があって驚いた。紙のアニメーションのようだった。もう一度見たいと思った。
- ・全体の雰囲気シュールリアリズム絵画のようで面白かった。
- ・シュールという言葉であっているかわからないけど不気味で真面目な映像の中で笑ってしまうところがあって不思議なアニメーションで面白かった。
- ・絵画がそのまま動いているような不思議な世界観だった。

- ・何がなんなのかわからなかった。カニがお嬢さん連れて行った時の音が好きだ。
- ・顔の表情が日本人と全く違った。音楽も含め不気味に感じた。内容があまりわからなかった。
- ・私が想像していたアニメよりも筆のタッチが見える絵画のような作品で新鮮だった。味のある深い色にチェロの音がとてもあっていて素敵だった。水中で演奏している時の音の表現が面白い—と思った。
- ・どこで止めても絵画作品として展示できそうな独特で綺麗なアニメーションだった。音楽とのコラボも良かった。
- ・カモメや小魚の動きが本物の生き物のようで、さらにカメラワーク？のようなものが素晴らしかった。シュールで面白かった。

(あおやぎ・りさ 一般教育等／フランス文学)

(2021年11月5日 受理)

## 註

- 1 ジャン＝フランソワ・ラギオニ監督、『お嬢さんとチェロ弾き』(Jean-François Laguionie, *La demoiselle et le violoncelliste*) 1965年。
- 2 Falaises d'Étretat .Source : [https://fr.tripadvisor.be/AttractionProductReview-g187147-d11464347-Etretat\\_and\\_Le\\_Havre\\_Small\\_Group\\_Day\\_Trip\\_from\\_Paris-Paris\\_Ile\\_de\\_France.html](https://fr.tripadvisor.be/AttractionProductReview-g187147-d11464347-Etretat_and_Le_Havre_Small_Group_Day_Trip_from_Paris-Paris_Ile_de_France.html) (2020.8.26)
- 3 Cliffs of Moher (2009.9.15筆者撮影)
- 4 ジャン＝フランソワ・ラギオニ『ジャン＝フランソワ・ラギオニ短編集』(2005 REVCOM/ICTV/Quartier Latin) より引用。以下同様。
- 5 デヴィッド・リー監督、『ライアの娘』(David Lean, *Ryan's Daughter*) 1970年、アカデミー賞助演男優賞、撮影賞受賞。
- 6 デヴィッド・リー 『ライアの娘』(Turner Entertainment.co)より引用。以下同様。
- 7 Robert Bolt (1924-1998) 英国の劇作家、脚本家。『アラビアのロレンス』(1962)、『ドクトル・ジバコ』(1965)等の脚本を手掛けている。
- 8 Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, 1857.
- 9 Adrian Turner, *Robert Bolt, Scenes from two lives*, Vintage, 1999, p.299.
- 10 *Ibid*, pp.305-311.
- 11 ラギオニは、『お嬢さんとチェロ弾き』の原型となる『星釣り人 (*Pêcheurs d'étoiles*)』について語るなかで、「raz-de-

- marée (高潮、津波)」という言葉を用いている。Pascal Vimenet, Gaël Teicher, Xavier Kawa-Topor, Jean-François Laguionie, Montreuil, Les éditions de l'Œil, coll. « Les Animées », 2016, p. 125. 以下、Laguionieと略す。
- 12 宮崎駿監督『崖上のポニョ』2008年
- 13 Hayao Miyazaki, *Pogno sur la mer*, 2008, Bouena Vista Home Entertainment (France) s.a.s. より引用。
- 14 宮崎駿をアニメーターへと誘った作品としては、東映動画による日本初めてのカラー長編アニメ映画『白蛇伝』藪下泰司監督 (1958) が挙げられる。
- 15 Paul Grimault (1905-1994) フランスのアニメーター、映画監督。高畑勲、宮崎駿らにも多大な影響を与えている。  
「ジブリを代表する高畑勲監督は思想面で、宮崎駿監督は映像面で、それぞれ『やぶにらみの暴君』に大きな影響を受けています。」叶精二『『王と鳥』と日本人との特別な関係』／高畑勲、大塚康生、叶精二、藤本一勇『王と鳥 スタジオジブリの原点』大月書店 2006年 p.42。  
「『やぶにらみの暴君』は後年、高畑勲さんと宮崎駿さんに影響を与えた、とよく語られます。高畑さんは、さっき言った「人間の内面を描くことの可能性」という点が大きいと思います。一方、宮（宮崎駿）さんの場合は、高低差を描くという意味で、技術的演出的な影響を受けたと言えるんじゃないでしょうか。」大塚康生「はじめて人間の内面を描いたアニメーション／同書 p. 70.
- 16 「『やぶにらみの暴君』は、新人教育の機会などに何度か試写されました。宮崎駿氏の世代がその最後だったはずです。」高畑勲『漫画映画の志『やぶにらみの暴君』と『王と鳥』』岩波書店 2007年 p.11.
- 17 「(グリモーは) フランス本国では、60年代にルネ・ラルー、ジャック・コロンバ、ジャン=フランソワ・ラギオニのデビュー作にスタジオや機材を貸し、自由な短編の創作を促しました。」叶精二『『王と鳥』と日本人との特別な関係』／同書 pp.45-46.
- 18 Festival international du film d'animation d'Annecy (1960-)
- 19 1993年に長編部門で宮崎駿の『紅の豚』、1995年に同じく長編部門で高畑勲の『平成狸合戦ぽんぽこ』がグランプリ (Cristal du long métrage) を受賞している。
- 20 「単純な画面にしよう。単純だけど、手はかかっている。そういう映画を作ってみよう」。宮崎監督は今回、こう宣言した。(…) 単純な物語を単純な線で描き、アニメ本来の豊かさを取り戻す試み。「僕らは帆船でオールをこいでやってきたんだから、これからもオールをこいでいくしかない。そういう船が、世界に一隻ぐらい存在したっていいじゃないか」「崖上のポニョ」制作中 宮崎駿監督に聞く」読売新聞 2008.1.8.  
Source : [https://archive.fo/20130902065255/http://www.yomiuri.co.jp/entertainment/ghibli/cnt\\_ponyo\\_20080109a.htm#selection-847.0-861.105](https://archive.fo/20130902065255/http://www.yomiuri.co.jp/entertainment/ghibli/cnt_ponyo_20080109a.htm#selection-847.0-861.105) (2021.9.27)  
「人の手で絵を動かすのがアニメーションの原点。今回は一度、アニメーターが全てを動かす世界に立ち戻ろう」と。こうしたコンセプトのもと、「崖上のポニョ」は制作されたという。」「アニメの原点に戻る—「崖上のポニョ」と奥井氏」(松村太郎の「デジタルとアナログの間」第5回)  
Source : <https://ascii.jp/elem/000/000/196/196436/>  
「世の中の、新聞の評とかでは、間違いなく宮さんは手書きの原点に回帰するんだって。言ってみれば、美談として、持ち上げるに決まってる。違うんだよ、それ。日本のアニメーションは、とっくに手書きでは何もできなくなってるんだよ。いまテレビで流れてるようなアニメーションだったら、いくらでも量産できるよ。あるクオリティを実現しようと思ったら、手書きの世界に依存したら、何もできないよ。映画というスケールでは、何もできない。それこそ、10分、20分の短編ならともかくさ。宮さんだって、それ分かってないわけじゃないんだよ。でも、ほくに言ったのは、「それでもやるんだ」って。宮さんと、ジブリの世界では、辛うじて実現したかもしれない。例えばさ、あのクラゲのシーンとか、3DCGで見事な実写と見紛うような、美しいクラゲの群生のシーンを作ることは、可能かもしれないけれど、手書きで描いたあの雰囲気は絶対でないよ。間違いなく。手業の持つる良さっていうのは、間違いなくあるんだよ。」「鈴木敏夫×押井守 対談『崖上のポニョ』を語る」ジブリの世界 スタジオジブリ非公式ファンサイト 2015.2.14.  
Source : <https://ghibli.jp.org/report/suzuki-oshii-2/> (2021.9.27)
- 21 Robert Whiting (1942-) ベストセラー作家、ジャーナリスト。
- 22 『ジブリの森とポニョの海 宮崎駿と「崖上のポニョ」』角川書店 2008年 p.35.
- 23 NHK総合テレビで放送された人形劇。1964年4月6日-1969年4月4日 (1263回)
- 24 『ひょっこりひょうたん島』1967より。棚部芹による模写。
- 25 Hayao Miyazaki, *Pogno sur la mer*, 2008, Bouena Vista Home Entertainment (France) s.a.s. より引用。
- 26 久里洋二 (1928-) アニメーション作家・画家・漫画家・小説家・造形作家・ドキュメント映像・空想昆虫コレクター。NHK「みんなの歌」の楽曲映像も放送開始当初 (1961) から1970年代前半まで手がけている。「クラリネットこわしちゃった」、「森の熊さん」等。
- 27 『ひょっこりひょうたん島』1967より。棚部芹による模写。
- 28 『富嶽三十六景』  
Source : [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The\\_Great\\_Wave\\_off\\_Kanagawa.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The_Great_Wave_off_Kanagawa.jpg)
- 29 Pascal Vimenet (1951-) 映画監督、作家、映画評論家、専門はアニメーション映画。
- 30 « Éther deviné — la légèreté cristalline du ciel — ; profondeur cachée — le miroir lisse de la mer. Ce décor à peine mouvant abrite, dans ses replis de papier, les couleurs



- fraîches du printemps et une minuscule et tragi-comique historiette humaine. » *Laguionie*, p.123.
- 31 Hayao Miyazaki, *Pogno sur la mer*, 2008, Bouena Vista Home Entertainment (France) s.a.s. より引用。
- 32 Paul Grimault, *Le Petit Soldat* (film, 1947, 11 minutes)
- 33 « Éther deviné — la légèreté cristalline du ciel — ; profondeur cachée — le miroir lisse de la mer. Ce décor à peine mouvant abrite, dans ses replis de papier, les couleurs fraîches du printemps et une minuscule et tragi-comique historiette humaine. Celle que Jean-François Laguionie a peut-être définie plus tard, évoquant *Le Petit Soldat* de Paul Grimault, par « l'alchimie des grands M : mélancolie, mime et musique ». Mélancoliques, décalés, un air de Petit Garçon de la lune à la Prévert (*L'Opéra de la Lune*), muets d'étonnement et d'incompréhension, *la Demoiselle et le Violoncelliste* ne peuvent venir au mouvement que portés par la musique du monde. » *Laguionie*, p.123.
- 34 Édouard Lalo (1823-1892) フランスの作曲家、ヴァイオリン・ヴィオラ奏者
- 35 Édouard Lalo, *Concerto en ré pour violoncelle et orchestre* (1876, 27 minutes)
- 36 « Ce poème d'une rencontre amoureuse, tout entier mimé par la Demoiselle et le Violoncelliste, annonce cependant, dans sa naïveté apparente empreinte d'une esthétique à la Douanier Rousseau, un parti pris qui choisit la pulsion du désir plutôt que les conventions sociétales. Les pommettes de la Demoiselle, rosissant à point nommé, en sont l'aveu. » *Laguionie*, p.123.
- 37 Bensi (弁士):パリの独立系映画館「Studio des Ursulines」によって制作されたウェブサイト。2歳から11歳までの親子を対象としている。
- 38 « Sinon, je crois que dans mes premiers films, j'étais très influencé par les peintres Naïfs, comme le Douanier Rousseau. Et puis cette influence s'est apaisée - heureusement en fait parce que c'était un peu une espèce d'imposture. Ensuite, ce sont plutôt les peintres Surréalistes, comme De Chirico ou Magritte, qui avaient aussi une façon de raconter leur peinture, qui m'ont influencé. C'est autant littéraire que pictural. » « Conversation avec J-F Laguionie ». Source : <https://guide.bensi.fr/news/conversation-avec-j-f-laguionie/71> (2021.9.6)  
(対談の内容から、『冬のルイズ (*Louise en hiver*)』が発表された直後、2016年頃のインタビューだと考えられる)
- 39 「素朴派 (Art naïf): 非学術的な運動であるため、素朴派のアートには独自の定義がない。しかしその特徴は、田舎の風景や民族衣装、家畜や野生動物など、一般的な題材を具象化していること、技術的な観点では、ルネッサンス期にレオナルド・ダ・ヴィンチが定義した西洋の遠近法の3つ
- のルール (距離に比例して物体の大きさが小さくなること、距離に応じて色が減衰すること、距離に応じて細部の精度が低下すること) を、自発的か否かに関わらず、無視していることである。」  
Source : [https://fr.wikipedia.org/wiki/Art\\_na%C3%AFf](https://fr.wikipedia.org/wiki/Art_na%C3%AFf) (2021.9.6)
- 40 « Ce décor de *La Demoiselle et le Violoncelliste*, où on voit des baigneurs sur la plage, est très connoté picturalement. C'était intentionnel ? — Oui, sûrement. Je savais à peu près dessiner dans la perspective, j'étais attiré par les peintres naïfs. Mais, à la fin de ce premier film, je me suis rendu compte que ce n'était pas très honnête de faire du faux naïf. Et j'ai retrouvé un peu plus de perspective d'un mes films suivants... » *Laguionie*, p.125.
- 41 « Dans ce qui constitue ces décors, il y a beaucoup d'éléments étrangers, des plantes qui appartiennent un peu à cette peinture naïve mais qui ont aussi l'air de lorgner vers des formes surréalistes... — C'est le fantastique qui m'attirait dans la peinture, dite naïve. Il y avait un décalage immédiat avec la réalité. Dont, apparemment, ne se souciaient absolument pas les peintres naïfs et ça donnait à tout ce qu'ils faisaient une dimension tout à fait étrange et fantastique. J'ai conservé très peu d'éléments découpés. » *Laguionie*, p.125.
- 42 « Mes films, ce sont d'abord des petites histoires, que j'écris sans savoir si elles vont donner quelque chose. Souvent, j'espère trouver un éditeur, mais au bout d'un moment, voyant qu'elles ne sont pas publiées, certaines me donnent envie de mettre des images dessus... Peut-être parce que je suis avant tout un dessinateur. » *Op. cit.*, « Conversation avec J-F Laguionie ». (強調は筆者による、以下同様)
- 43 « Le premier film où je me suis rendu compte que le cinéma, c'était autre chose que Gabin ou les aventures de Gary Cooper, c'est grâce à un copain rencontré en 1<sup>er</sup> année des Arts appliqués qui me dit : « Je vais voir *Le Septième Sceau* de Bergman ». Je l'accompagne et j'étais sidéré. Le cinéma était un art, comme la peinture! Donc, je suis tout à coup transporté ailleurs. Le monde devient immense... Le pavillon de banlieue en prend un coup... », *Laguionie*, p. 31.
- 44 « J'ai, en fait, toujours eu des problèmes avec l'animation dans mes petites histoires. Si j'avais pu en mettre encore moins en trouvant un langage encore plus proche de la bande dessinée, par exemple, mais dans la dimension de montage cinématographique, j'aurais été ravi. » — « Quelque chose de plus minimaliste... » — « Oui, quelque chose qui pourrait se raconter en images presque fixe... », *Laguionie*, p.125.

- 45 国立劇場芸術高等専門学校 (ENSATT) (École nationale supérieure des arts et techniques du théâtre) 1941年に「演劇部門専門養成センター (Centre de formation professionnelle du spectacle)」という名称で設立されたフランスの11の国立演劇学校の1つ。当時は「演劇芸術センター (Centre d'art dramatique)」あるいは「ブランシュ通り (Rue Blanche)」と呼ばれていた。
- 46 « J'avais écrit une première histoire pour un spectacle d'ombres chinoises au Centre d'art dramatique de la rue Blanche, où j'étudiais le décor de théâtre. Histoire que j'ai montré à Paul Grimaud, quand Jacques Colombat me l'a fait rencontrer. Elle était plus axée sur la couleur et mettait en scène des personnages pour pouvoir utiliser les ombles chinoises. C'était des personnages qui avaient perdu la couleur, je ne sais plus pourquoi et, à la suite d'un raz-de-marée, ils se retrouvaient au fond de la mer, qui était très coloré. Alors, j'ai passé des ombres chinoises aux marionnettes. J'avais intitulé ce petit spectacle *Pêcheurs d'étoiles*... » *Laguionie*, p.125.
- 47 *Op.cit.*, *Laguionie*, p.68.
- 48 *Op.cit.*, *Laguionie*, p.123.
- 49 «Alors, j'ai passé des ombres chinoises aux marionnettes.» *Laguionie*, p.125.
- 50 この切り絵がラギオニをポール・グリモーに結びつけることになる。  
「彼 (=ジャック・コロンバン) は私にこう言った。「もし、切り絵で映画を作りたいなら、ポールに会いに来て、君の物語を見せてくれればいい...」 ( « Si tu veux faire aussi un film en papier découpé, tu peux venir voir Paul, montre lui tes petites histoires... ») 」 *Laguionie*, p.35
- 51 « Techniquement, c'était assez rudimentaire, c'était du papier découpé. Les vagues étaient découpées dans de grandes formes pour que je puisse les faire glisser latéralement, monter, descendre, etc. Finalement, c'est assez convaincant : dans un schéma narratif le plus plat possible, dans lequel il n'y a pas de profondeur sentimentale, une technique de glissement d'animation en deux dimensions, c'est tout à fait sympathique. Ça m'obligeait à mettre les personnages de profil, ce qui ne me dérangeait pas. Si j'en mettais un de face, je lui interdisais de bouger ! ... » *Laguionie*, p.124.
- 52 註15参照
- 53 « Le drôle étant que, pour la première fois, Jean-François Laguionie introduit dans l'espace final ordonnée, policé et corseté de la plage et de ses baigneurs, un personnage du monde réel... Paul Grimault lui-même, producteur du film, moustachu qu'à ordinaire, engoncé dans un grand costume de bain rayé. » *Laguionie*, p.124.
- 54 Source : <https://ja.wikipedia.org/wiki/ポール・グリモー> (2021.8.31)
- 55 « Qu'on ne me fasse pas dire, pour autant, ce que je n'ai pas dit : le décor et ses personnages ne sont qu'une convention, une allégorie peut-être, mais surtout un clin d'œil. Clin d'œil amical au père... mais au grand-père aussi... ! » *Laguionie*, p.124.
- 56 Charles-Émile Reynaud (1844-1918) フランスの写真家、科学教師、発明家、映画監督。テアトル・オプティックを用いた世界初の動画上映により、アニメーション映画の先駆者であったとされている。  
Source : [https://fr.wikipedia.org/wiki/%C3%89mile\\_Reynaud](https://fr.wikipedia.org/wiki/%C3%89mile_Reynaud) (2021.8.31)
- 57 « Ne voit-on pas en fond de champ, sagement alignés en rang d'oignon, des cabines de bain, typique de celles qui se trouvaient sur nos plages à la fin du 19<sup>e</sup> siècle, de celles qu'avait mise en scène Émile Reynaud dans l'une de ses pantomimes, *Autour d'une cabine ou Méaventure d'un copurchic aux bains de mer* (1897)? » *Laguionie*, p.124)
- 58 映像はYouTubeで視聴可能。 <https://www.youtube.com/watch?v=tvXl0bi2AAdo>
- 59 Marcel Proust (1871-1922) フランスの作家。主要作品『失われた時を求めて』。
- 60 « En 1892, Marcel Proust à 21 ans, à genoux et tenant une raquette de tennis, devant Jeanne Pouquet (la Gilberte de la *Recherche*) debout sur une chaise. Rue des Archives/*Rue des Archives/Tallandier* » dans « Marcel Proust 1913 : et la *Recherche* fut ... », Sébastien Lapaque, *Le Particulier*, le 9 oct 2013.  
Source : <https://www.lefigaro.fr/livres/2013/10/09/03005-20131009ARTFIG00565-marcel-proust-1913-et-la-recherche-fut8230.php> (2020.8.24)
- 61 « Marcel Proust in Cabourg, 1896 » dans « My Strange Friend Marcel Proust », Philippe Soupault, the *Paris Review*, le 26 oct 2016.  
Source : <https://www.theparisreview.org/blog/2016/10/26/strange-friend-marcel-proust/> (2020.8.24)
- 62 Sandro Botticelli, *Primavera*, 1482 circa, Galleria degli Uffizi, Firenze.  
Source : <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Botticelli-primavera.jpg> (2020.5.10)
- 63 ラテン名は左から、ライティティア・ウベリマ「豊かなる喜び」、ウィリディタース「青春」、スプレンドル「光輝」。エドガー・ウィント (田中英道他訳) 『ルネサンスの異教秘儀』 晶文社 1986年 p.104/Edgar Wind *Pagan mysteries in the Renaissance*, 1958, Faber and Faber.
- 64 Raffaello Sanzio, *Tre Grazie*, 1503-1504, Museo Condé, Chantilly.  
Source : [https://it.wikipedia.org/wiki/Tre\\_Grazie\\_\(Raffaello\)](https://it.wikipedia.org/wiki/Tre_Grazie_(Raffaello)) #/media/File:Three\_Graces.jpg (2020.5.10)

- 65 Salomon Reinach, «Trois hypothèses de MM. Eisler et Panofsky à propos des Trois Grâces de Raphaël », *Comptes-rendus des séances de l'académie des inscriptions et belles-lettres*, vol. 74, n° 2, 1930, p. 191-193.  
[https://www.persee.fr/doc/crai\\_0065-0536\\_1930\\_num\\_74\\_2\\_75909](https://www.persee.fr/doc/crai_0065-0536_1930_num_74_2_75909) (2020.5.10)
- 66 Source : [https://fr.wikipedia.org/wiki/Les\\_Trois\\_Gr%C3%A2ces\\_\(Rapha%C3%ABl\)](https://fr.wikipedia.org/wiki/Les_Trois_Gr%C3%A2ces_(Rapha%C3%ABl)) (2020.5.10)
- 67 Thomas Bodokin, *The approach to Painting*, Read Books, 2010, p. 108.
- 68 Michael W. Cole, *Sixteenth-Century Italian Art*, Wiley, 2006, p. 43.
- 69 Lucas Cranach der Älter, *Drei Grazien*, 1531, Musée du Louvre  
 Source : [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lucas\\_Cranach\\_d.%C3%84\\_-Drei\\_Grazien\\_1531\\_\(Mus%C3%A9e\\_du\\_Louvre\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Lucas_Cranach_d.%C3%84_-Drei_Grazien_1531_(Mus%C3%A9e_du_Louvre).jpg) (2020.5.10)
- 70 Antonio Canova, *Tre Grazie*, 1813-1816, Museo dell'Ermitage  
 Source : [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Antonio\\_Canova-The\\_three\\_Graces-Hermitage.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Antonio_Canova-The_three_Graces-Hermitage.jpg) (2021.9.1)
- 71 Aristide Maillol, *Les Trois Grâces*, 1938, Jardin des Tuileries, Paris.  
[https://fr.wikipedia.org/wiki/Fichier:Les\\_Trois\\_Gr%C3%A2ces\\_by\\_Aristide\\_Maillol\\_\(Tuileries\)\\_02.jpg](https://fr.wikipedia.org/wiki/Fichier:Les_Trois_Gr%C3%A2ces_by_Aristide_Maillol_(Tuileries)_02.jpg) (2021.8.31)
- 72 Niki de Saint Phalle, *Les Trois Grâces*, 1994. (67,9 x 77,5 x 73,7 cm. (26.7 x 30.5 x 29 in.)  
 1994年のニキ・ド・サンフェールによる『三美神』である。2012年のDrouotの競売で75000€の値がついている。  
 Source : [http://www.artnet.fr/artistes/niki-de-saint-phalle/les-trois-graces-OLCirnQWTR\\_rSalVZfrnIA2](http://www.artnet.fr/artistes/niki-de-saint-phalle/les-trois-graces-OLCirnQWTR_rSalVZfrnIA2) (2020.5.10)
- 73 Source : <https://www.pinterest.at/amp/pin/272467846182297593/> (2020.5.10)
- 74 ギヨーム・ド・ロリス ジャン・ド・マン／篠田勝英訳『薔薇物語』平凡社 1996年 p.456-457.／Guillaume de Lorris, Jean de Meung, *Le Roman de la Rose*, 1201-1300, f°160v-f°161r. (パリ国立図書館フランス語写本1573番、ラングロワの分類によるH写本) 強調は筆者による。
- 75 Evrart de Conty, *Livre des échecs amoureux moralisés*, vers 1390.
- 76 Evrart de Conty, *Livre des échecs amoureux moralisés*, énuméré par Robinet Testard, 1496-1498, f°14v.  
 Source : [gallica.bnf.fr / Bnf](http://gallica.bnf.fr/Bnf) (2020.7.16)
- 77 *Moires, les trois divinités du Destin : Clotho, Lachésis et Atropos*.  
 Source : <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Moires.jpg> (2020.6.18)
- 78 Unknown author, *The Triumph of Death, or The 3 Fates*. Flemish tapestry (probably Brussels, ca. 1510-1520), Victoria and Albert Museum, London.  
 Source : <https://essexmyth.wordpress.com/2017/05/29/sleeping-beauty-and-the-fates-of-mythology/> (2020.6.18)
- 79 Francesco Petrarca, *Triumph*, 1351-1374.
- 80 «This is the third subject in Petrarch's poem *The Triumphs*. First, Love triumphs; then Love is overcome by Chastity, Chastity by Death, Death by Fame, Fame by Time and Time by Eternity.»  
 Source : [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The\\_Triumph\\_of\\_Death\\_or\\_The\\_Three\\_Fates.jpg?uselang=en-gb](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The_Triumph_of_Death_or_The_Three_Fates.jpg?uselang=en-gb) (2020.7.23)
- 81 Francesco Petrarca, «Trionfo della Morte [Triumphus Mortis] » in *Le rime sparse e i Trionfi*, Laterza, 1930, pp. 331-342.
- 82 John Melhuish Strudwick, *A Golden Thread*, 1885, Tate Britain.  
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Strudwick\\_A\\_Golden\\_Thread.JPG](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Strudwick_A_Golden_Thread.JPG) (2020.6.21)
- 83 Francesco Bacchiacca (1494-1557), *Le tre Parche*, Ca' Rezzonico (Pinacoteca Egidio Martini)  
 Source : [https://fr.wikipedia.org/wiki/Fichier:Ca%27\\_Rezzonico\\_-\\_Le\\_tre\\_Parche\\_\(Inv.268\)\\_-\\_Bacchiacca.jpg](https://fr.wikipedia.org/wiki/Fichier:Ca%27_Rezzonico_-_Le_tre_Parche_(Inv.268)_-_Bacchiacca.jpg) (2020.6.21)
- 84 Peter Paul Rubens, *Les Parques filant le destin de Marie de Médicis (Le destin de Marie de Médicis)*, 1622-1625, Musée du Louvre.  
 Source : [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Peter\\_Paul\\_Rubens\\_-\\_Sketches\\_-\\_WGA20439.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Peter_Paul_Rubens_-_Sketches_-_WGA20439.jpg) (2020.6.21)
- 85 Francisco de Goya, *Átropos o Las Parcas*, 1819-1823, Museo del Prado  
 Source : [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Atropos\\_o\\_Las\\_Parcas.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Atropos_o_Las_Parcas.jpg) (2020.6.22)
- 86 Alfred Agache, *Les Parques*, circa 1885, Palais des Beaux-Arts de Lille.
- 87 L.B. Hansen, *Nornona vid Urdarbrunnen*, 1893 (in Fredrik Sander's 1893 edition of the Poetic Edda; *Edda Sämund den vises*, p.7)  
 Source : [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nornorna\\_spinner\\_%C3%B6dets\\_tr%C3%A5dar\\_vid\\_Yggdrasil.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nornorna_spinner_%C3%B6dets_tr%C3%A5dar_vid_Yggdrasil.jpg) (2020.6.22)
- 88 L.B. Hansen (1856-1933) ノルウェー、グロルド (Glorud) 生まれの木版画家。10年ほどスウェーデンで活動している。『ウルズの泉のノルンたち』はスウェーデンで発表されている。
- 89 «Nothung ! Nothung ! Glaive rêvé !» in Richard Wagner, *L'Anneau du Niebelungen*, illustré par Arthur Rackham, Hachette et Cie (Paris), 1910, fronticepice.



- Source : gallica.bnf.fr / Bnf  
 Source : <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Nornsweaving.jpg> (2020.6.22)
- 90 Johann Heinrich Füssli, *Die drei Hexen*, 1783, Kunsthhaus, Zurich, Switzerland.  
 Johann Heinrich Füssli, *Die drei Hexen*, 1783, Kunsthhaus, Zurich, Switzerland  
 Source :  
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Johann\\_Heinrich\\_F%C3%BCssli\\_019.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Johann_Heinrich_F%C3%BCssli_019.jpg) (2020.6.22)
- 91 Anker Eli Petersen, *Völuspá-The Norns and the Tree*, Stamp FO of the Faroe Islands, 2003.  
 Source : [https://commons.wikimedia.org/wiki/Anker\\_Eli\\_Petersen?uselang=ja](https://commons.wikimedia.org/wiki/Anker_Eli_Petersen?uselang=ja) (2020.7.25)
- 92 「トキさん」という名前も「時」を感じさせる象徴的な名前にも思われる。
- 93 Hayao Miyazaki, *Pogno sur la mer*, 2008, Bouena Vista Home Entertainment (France) s.a.s. より引用。
- 94 高畑勲をアニメーションの世界に導いたポール・グリモーによる『やぶにらみの暴君』(1952 日本公開1955) もまた、原作のアンデルセンの童話『羊飼いの娘と煙突掃除』の世界を逆転させている。(高畑勲 *Op.cit.*, pp. 3-4)
- 95 « Mine de rien, *La Demoiselle et le Violoncelliste* mets ses jeunes pas dans les traces de ceux de deux sacrés ancêtres, tout en incitant cependant ses deux amoureux à prendre au plus vite la poudre d'escampette. Ne dit-on pas que pour vivre heureux, il vaut mieux vivre cachés, y compris loin de ceux qu'on admire le plus ? » *Laguionie*, p.124.
- 96 Source : <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%B2%E3%82%87%E3%81%A3%E3%81%93%E3%82%8A%E3%81%B2%E3%82%87%E3%81%86%E3%81%9F%E3%82%93%E5%B3%B6> (2021.10.21)
- 97 « On voit à quel point cela peut nourrir ultérieurement l'apparition de la Demoiselle et du Violoncelliste, qui, eux surgissent de nulle part… ou plutôt d'un improbable fond marin, un peu comme Planski… » *Laguionie*, p.33.
- 98 Roman Polanski (1933-) ポーランド系フランス人。俳優、監督、プロデューサー、脚本家。演劇、オペラの演出家でもある。
- 99 Marcel Marceau (1923-2007) フランスのパントマイム・アーティスト。
- 100 *Deux hommes et une armoire* (1958, 15 minutes) ウッチ国立映画学校卒業作品。サンフランシスコ国際映画祭 ゴールデン・ゲート賞 最優秀短編映画賞 (1958)、クノック・ル・ズート国際実験映画祭 銅メダル (1958)、オーバーハウゼン国際短編映画祭 佳作 (1959)
- 101 « Un jour, à la Cinémathèque, on était un peu en avance, on entre dans la salle, et il y avait Polanski qui était en train de montrer un protection privée à Marcel Marceau, *Deux hommes et une armoire* ou *Le Gros et le Maigre*, qu'il n'avait pas encore sonorisé. Et on a regardé le film muet… et à la fin ils descendent dans la mer avec l'armoire… Polanski fait partie de mon panthéon. » *Laguionie*, p.33.
- 102 Source : <https://www.dailymotion.com/video/x1aykd>
- 103 黒澤明『八月の狂詩曲 (はちがつのラブソディー)』1991, 98 minutes.
- 104 村田喜代子『鍋の中』文藝春秋 1987 (芥川賞受賞作品)
- 105 「黒澤明 映画の秘密『八月の狂詩曲』の現場から」NHK.BS.1991年放送
- 106 Joshua Slocum (1844-1909)